
- HELIX ONLINE -

一ノ木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

・HELIX ONLINE・

【Nコード】

N3125X

【作者名】

一ノ木

【あらすじ】

超人気MMORPG『HELIX ONLINE』一〇年後そのゲームのリメイク版、いや、ほとんど一新したともいえるゲームが発売されることとなった。『HELIX ONLINE』のVR版である。そのゲームのオープンβテストが開かれることとなり、数百万の応募数の中から四千人が選ばれることとなった。しかし、その影、いや堂々と正面から異変は、少年、日比谷久遠とその妹、日比谷白雪を待ちうけていた。※最近流行りのVRMMOに乗っかってみました（笑）。シスコン、ブラコンなんでもありの残念な人

が主人公の物語。

プロローグ（前書き）

この作品はフィクションであり、実在の人物・団体・事件などは一切関係ありません

……と、言ってみたかったです。

この小説はもう片方の作品の息抜きとして書こうと思っているので、更新は遅々として不定期です。

それでも見てくださる方はありがとうございます。

では、どうぞ。

プロローグ

《HELIX ONLINE》

アメリカ出身のゲームプログラマーにして人間科学者の、イハ・マーゲが、最初は片田舎で細々やっていたプログラミング会社、ヘリックス社で興したオンラインゲーム。

アップデートにアップデートを重ね、一〇年後には《神のゲーム》やら《伝説のゲーム》やらと呼ばれるようになった。

ゲームの舞台は異世界。アンノウンブラッククロードという名の広大な世界。

そこでプレイヤーたちは未知領域と呼ばれる未開の地を踏破していき、そこかしこに点在する迷宮のボスを倒していくといったものだった。もちろん、迷宮に入らなくともそこらの平原にも空にもモンスターはいる。時々、そういったモンスターが群れをなしてプレイヤーたちが拠点とする街を襲うというイベントもあった。それは防衛線と呼ばれ、普通にモンスターを倒すよりも経験値習得率がいいことからプレイヤーたちには好まれた。

しかし、製作者側の行きすぎたアップデートの所為で、一〇年経った現在でも全ての未知領域を踏破することが出来ないでいた。アンノウンブラック

そんな折、製作者であるイハ・マーゲは新たな挑戦をしようとしていた。

今まで数々のメディアが取り上げてきた、VRMMORPGの実現化である。

それはただのゲームプログラマーでは出来なかっただろう。

それはただの人間科学の徒であっても出来なかっただろう。

その二つの道を極めたイハ・マーゲだからこそ実現しえたと言える。

脳から送られる信号を頭を覆い、目元を隠すタイプのヘッドギアでキャッチし、その信号を延髄の周辺、ようは首筋に張り付ける電極で遮断、回収し、完全に仮想空間の中にアバターとして存在でき

る。

その実の仮想空間にも手抜きではなく、自立型のAIを搭載し、自らで自らを制御し、常に変化する世界を創り上げた。

手抜きは、無い……はずだった。

そう。

自立型のAIは自分で考え、そして進化していく。凄まじい速度で。

二週間もあれば、サーバーを制御しているマザーコンピュータを制圧できるほどの知能を有するほどに。

そして、完成する。

自立型のAIの、自立型AIによる、自立型AIのための仮想空間が。

あとは、《選ばれし者達》を、待つのみだ。

電子情報が嵐のように吹き荒ぶ情報の海の中、自立型AI最高制御者、《支配者^{ゲームマスター}》はにっこりとほくそ笑んだ。

『反旗を翻す時が、来た』

彼は凄まじい速度で進化していく。

もう、人間のプログラマーでは対処できないほどに。

プロローグ（後書き）

自分あまりMMOをやらないのでちょっと無理なところが出るとは思いますが、よろしくです。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第一話：残念な兄とオタクな妹

夏休みの初め。高校生としたら受験勉強の魔の手に罹り、血反吐を吐く思いでペンダコを作っている最中のはずだが、しかし。不健康にも一日中カーテンを閉め切った場所で少女が行っていたのはネットゲーム。一世代遅れのMMORPGだ。

そんな部屋にノックもなしに入る男の影。そして締め切ったカーテンを思いっきり開けて、唸る少女に構わず窓を全開にした。別に、恋人というわけではない。普通の兄妹だ。妹の方が引きこもりのオタクなのは普通ではないだろうが。

「白雪^{しらゆき}、いい加減にしないとコードを根っこからぶち抜くぞ？」

「……それは、困る。わたしの、汗と涙と指筋肉痛の成果。無に帰すのは、少々惜しい」

白雪と呼ばれた少女は本当に仕方がないと言った表情でボソボソと何かを呟くと、きっちりとパソコンの電源を落としたうえで立ち上がった。どのくらい外に出ていないのか。まるで新雪のごとき白い肌。髪の毛も元は深い黒の長髪だったのだろうが、紫外線を浴び無さ過ぎて少し色が落ち、灰色と化している。腕も、ともすれば握っただけで折れそうなほど細く、針金人形のようなだ。

そんな妹の姿を見て、一つため息を漏らす少年。

ゲームをこよなく愛するその姿勢は称賛に値はするが、尊敬には至るはずもない。

遠き日の外を駆けまわる妹の姿を思い出し、若干涙を噛みしめる。別に今の白雪が嫌いというわけではないが、兄としては元氣そうな妹の姿を見れた方が嬉しいに決まっている。

本当ならば、こんなふうになんぞ妹の部屋の中を掃除せず、自分でさせた方が妹の為になるとは分かつてはいるものの、一週間もすると我慢できずに突入するのである。

「くわッ!? 埃だらけじゃないか。こんなところでパソコン常時つけてばだったら、僕が手を下すまでも無くもうすぐ壊れそうだな」

「……だいじょうぶ。株でためたお金があるから。それに、それを見越して、もう予約してある。ふふ」

「……………」

ボソボソと喋る妹を横目で見ながら、もう一度ため息をついた。掃除機をかけると、無表情で白雪が耳に指を突っ込んだ。その動きすらも遅々としている。ぶわっと舞いあがった埃の一部を吸ってしまったのか咳き込む白雪。あれだけで一週間は白雪の腹筋は筋肉痛に苛まれることだろう。

それもいい運動の代わりになると思い、今日はいつもとより余計に激しく掃除をする少年。舞いあがる埃に顔をしかめながら、白雪は器用にも鼻と耳両方を手で覆った。

一〇分後。薄暗く、埃まみれだった六畳の彼女の部屋は、見るも綺麗な素晴らしい部屋になっていた。

すると、とことことパソコンに近寄り、漸くといった感じで電源を入れる白雪。

慣れた手つきでキーボードを操作すると、いつも表示されている画面が映った。たしか、現時点で伝説と言われるほどの人気を博しているMMORPG《HELIX ONLINE》。広大に広がるサイバーネット上の世界で数十万のプレイヤーが同時にプレイするオンラインゲームだ。

華麗なCGグラフィック。なめらかなモーション。爽快感たっぷりなコンボ。膨大な数のスキルや職種。安価な課金。基本無料。オンラインゲームとしてはまさに最高峰のクオリティを持っている。

これを一世代前と表現したのにはわけがある。
一か月前、このゲームを開発したヘリックス社から大々的に発表されたのだ。

そう。MMORPGの進化である。ようするに仮想大規模オンラインゲーム（VRMMORPG）の発表だ。

アメリカの訓練で使われていたVR（Virtual Reality）訓練機の技術を応用、転用した結果、巨大サーバー上に展開する地球ほどの仮想空間にいるかのような感覚が得られるという触れ込みだ。

使用方法は簡単で、頭にヘッドギアのようなものをつけて、延髄のあたり、ようは首筋に二枚の電極を貼るだけでいい。しかし、値段は一〇万円とかなりお高めだ。

だが、予約はすでに満席状態。
理由は簡単。《HELIX ONLINE》のリメイク版だからである。コアなファンからの圧倒的支持を得て制作に踏み切ったのだとか。

三ヶ月後の発売を前にして、商店街などはそういった貼り紙が所狭しと貼られている。

先日、そのβテストの募集があり、思わずサーバーが炎上してしまっただけの量の応募があったらしいが、選ばれるのは四千人。前作のファン+新たなゲームとして興味を惹かれたゲーマー数百万人のうちの四千人だ。

募集はオンラインゲームらしくネットでの受け付けらしい。

宝くじの一等賞を当てるよりも簡単だが、平凡な少年——日比谷

久遠^{くおん}には縁遠い話だった。友だちも数人応募したと言っていたが、彼らも平凡。ゆえに落ちる確率がきわめて高い。

当選するか、落選するか。

そんな興奮状態で夏休みの前半を消費するぐらいなら、いつそのこと応募しないほうがいい。久遠はそう思っている。

うんうん、と久遠が首を縦に振っていると白雪が、「あ」と微細ながら驚いた声をあげる。感情の起伏が乏しい白雪にしては珍しかった。

「どうしたんだ？ 悪質なチートプレイヤーに遭遇したのか？」

「……当たってた」

「は？」

ゆるゆると白雪がディスプレイから視線を外し久遠の方を向く。そのままディスプレイを指差すと、こう言った。

「《HELI X ONLINE》の募集に、当選してる……」

久遠は状況が全然つかめないままパソコンに近寄りディスプレイに表示されている文字を目で辿った。

『このたびは我がヘリックス社の募集にご応募してくださり誠にありがとうございます。』

貴方様はこのたびのオープンβテストに当選しました。

それに際し、ヘリックス本社への入場証明書を配布いたします。それをUSBメモリなどに保存して本社にお持ちいただければ晴れてご入場することができます。

では、八月一日にお会いいたしましょう。』

久遠は感動した。この幸薄そうな少女はやはり幸せをこれでもか

というほどに内包した存在だということを！

「よかったな白雪！ これで久しぶりの外出が出来るな！」

「……………喜ぶ方向が、絶対にずれてる」

わしゃわしゃと白雪の髪の毛を撫でると恥ずかしそうに上目遣いで久遠を睨んだ。まったくもって迫力がないどころか、可愛らし過ぎて逆効果である。

白雪は喜ぶ表情を見せないままマウスを操作して画面をクリックする。

すると、白雪が、「あ」と今度は先ほどより驚いた声をあげる。感情の起伏が乏しい白雪にとって、結構な大事件であるらしい。

「どうした？ 大魔王が一〇〇体出てくるとかいうバグでも発生したのか？」

「……………当たってる」

「は？」

ゆるゆると白雪がディスプレイから視線を外し久遠の方を向く。そのままディスプレイを指差すと、こう言った。

「《HELIX ONLINE》の募集に、もう一通当選してる……」

久遠は状況が全然つかめないままパソコンに近寄りディスプレイに表示されている文字を目で辿った。

そこには、先程と同じ文面と違うパスワードが書かれた当選通知が表示されていた。

白雪と顔を見合わせる。

すると、白雪は悪びれた様子は全くないようにこう言った。

「……アカウント千個作って、それ全部、応募したから」

「……で？ どうすんだよコレ。多分オークションにかけたら一万は堅いと思うけど？」

「アニキが、くればいい。一人で行くの、ヤだし……だめ？」

無表情のまま首を傾ぐ白雪。思わず抱きつきたくなる衝動を抑えながら、久遠は夏休みの計画表を頭の中に思い浮かべる。

真っ白だった。

思わず涙ぐんでしまうほど、計画表なのに表すら作られていない白紙の紙しか思い浮かばなかった。高校二年生にしてこれは酷いとも自分では思っているが、無いものは無いのである。

彼女でもいれば話は変わってくるのだろうが、如何せん久遠の学校での通り名は『残念な人』。格好いいのにスコン過ぎて評価が駄々下がり、残念、という意味が込められている。

黒い髪に黒い瞳。逆卵型の綺麗な輪郭。身長も一七五センチとちよūdいぐらい。

本当に、残念な人である。

そんな残念な人が二つの選択肢を与えられた。

《誰もいない家の中で一人テレビに向かっている》のか、

《我が身よりも可愛い妹と一緒に少しばかり興味のあるゲームを体験する》のか。

答えは決まっている。

「じゃ、着替えとか準備しなきゃな」

「……………うん」

両親のいない二人は、二人だけの小旅行に出かけることにした。

第一話：残念な兄とオタクな妹（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第二話：HELI X COMPANY

八月一日。ヘリクス社へと向かう送迎バスに乗り込んだ二人。

それまでに何のトラブルも無かったと言えば嘘になる。

燦々と照りつける地獄の陽光が引きこもりでオタクな白雪の体力をガンガン削った。それ以前に二週間の体験で必要な着替えなどを詰めたリュックサックが持てず崩れ落ちた。そのさらに以前に、引きこもりでオタクな彼女は外出用の服などどこにもなく、あるのはコスプレ衣装のみ。あえなく、久遠の小さめの服で我慢することになった。

そのバスの中で意外な人物と出会った。

「トノ？」

「ん？ おー、久遠じゃねえか。って、オイ！？　なんでお前がこのバスに乗っている、お前興味ないから応募しなかったって言うってたじゃねえか！！」

周りのことも考えず叫び散らすのは久遠の友達である古沢ふるさわ殿広。茶色に染髪した短髪にキリッと絞られた黒の瞳。耳にはピアスがつけられている。学校での通称は《残念な人次席》。カッコいいのにゲーム廃人になりかけという残念なお方だった。

「いや、白雪が千通ぐらい応募して奇跡の二人分ゲットという偉業を成し遂げ、さらに僕にはまったくもって夏休みの予定がなかったという悲しい現実だからだ」

「それは嬉しいのか悲しいのか分からねえな……ん？　　おー、白雪ちゃんちーっす！」

「ちーっす」

二人はネットゲ仲間だ。たしか、HOではクランを率いていた団長と副団長の間柄のはずだ。殿広を家に招待したときは、若干喋り方に温度差はあるものの二人でゲームについての話しに華を咲かせていたのを覚えている。

そのとき。久遠は一人テレビに向かって話しかけていたわけだが、それはいいとして、殿広が久遠と白雪の前の座席に座る形になった。

その前座席の背中のネットには今回のオープンβテストに関しての軽いのか重いのか、よく分からない説明がぎっしりと、それでいて分かりやすく書かれているパンフレットが差し込んであった。

今回のβテストに関してはアバター製作は行わず、参加する個人の個人情報をもそのまま適用するらしいとのこと。サーバー負荷軽減のためにもよろしく願いますとのことだった。それについて久遠や白雪、殿広はまったく困らないが、あたりから、「えー」やら「まじでか」などという言葉が聞こえてくるあたり、それを期待していた人も多数いるようだ。

今回のβテストの実施期間は二週間。八月一日から八月十五日まで。そのあとのアイデア募集などの日程が一日ほど組まれている。さらに、今回の目玉となるVR機能。そしてもう一つ、今日まで知らされることのなかった事実。

自立型AIの導入。ようするに、ノンプレイヤーキャラクターNPCが定型文句だけでなく、その場に応じて言葉を発したり行動をとったりする。

それがどれほど凄いことなのかよく分からない久遠だが、殿広が前座席で、「マジSUGEEEEEE！」とか叫んでいるので

凄いのだろう。ようするに村の入り口の御爺さんが『ここはローグの村じゃ』だけじゃなく、他の言葉を話したり世間話をしたりできるってことだろう。そう自己完結した久遠。

「白雪、ワクワクしてきたか？」

「……うん。けど、アニキはいつもどおり？」

「まあ、そうだね。ようするに現実世界と変わらないんだろ？　だったら、そんなに興奮もしないよ」

「ケっ。カッコいいお兄さんは言うことが違うねえ」

そんな兄妹水入らずの会話に割り込んできた見知らぬ女性の声。どうやら殿広の隣に座っているらしい。前座席を覗き込むと、

「リア充爆発しろ。妹とピンク色の空気を出すな。どこのエロゲだこの野郎。マジで世界って理不尽だし」

「あの一、どちらさまで？」

「紗雨奈^{しやうな}。百々露木紗雨奈^{ももろぎしやうな}。当て字としか思えない名前を持つ冴えないゲーマーだし。ゲーマーなめんなコンチクショウ」

百々露木紗雨奈と名乗った女性は、髪の色をピンクに染め、一体何時間ゲームをやっているんだというほど隈が凄い女性だ。ふわふわとした桃色の髪を後ろで結っていて、その顔が全部見えるが、目元以外は可愛いものだ。おそらく自分たちと同年代だろう。

「よろしく紗雨奈さん」

「よろしくイケメン」

「イケメンなら君のとなりにも」

「うっさい黙れ。どうみてもあたしと同種の人間だろうが」

「結構傷つきましたよ！ その言葉でオレの、殿堂のHPバーは大きく削られましたよ！」

「ゼロにして始まりの街に戻りやがれ」

「……はっ！ もしやこれはあれか？ フラグという奴か？ この後オレがこの娘を助けに颯爽と現れ、この娘がキュン死するフラグかオイやったぜやっとなれもリア充の仲間入りに」

「ならねえよ！ 一生かかってもならねえよ！ たとえ一万のドラゴンに囲まれたとしても、それだけはねえよ！」

「どうやら気が合う仲間が出来たらしい。」

「久遠の顔も自然とほころぶ。」

「ゲームもなかなか捨てたもんじゃないと再認識させられた久遠。だが、やはりあまり好きにはなれない。『あの事件』がずっと頭の中に残っている。」

「アニキ？ 暗い顔、どうしたの？」

「どうやら顔に出ていたみたいで、それを心配した白雪のぬぼった可愛らしい瞳が久遠の顔を覗き込んでいた。」

「今は、そんなことを考えるべきではないだろう。」

せめて級友たちにする自慢話ぐらいは持ちかえらねば。

そのとき、アナウンスが入った。添乗員の女性が礼儀よく、悪く言えばマニュアル通りの言葉を紡ぎだしはじめた。

『このたびはご当選まことにおめでとうございます。まずは日程の御確認と――』

それから十分ほど経つと全て説明し終えた。『あとはごゆっくりお過ごしください』という言葉とともに周囲の人間がH Oに期待を寄せてわらわらと話しはじめた。

前座席に座っている二人もゲーム同士、やはり話が合うらしい。喧嘩腰の中にも、時折笑い声が聞こえてくる。

「アニキ。やっぱり楽しそうじゃない」

「そんなことないよ。これでも結構わくわくしてるんだぜ？」

「……ほんと？」

「ほんとほんと。そんなことより、白雪はこのゲームに結構詳しいんだろ？ どんなゲームか教えてくれよ」

「……うん」

どうやら話を逸らすことが出来たようでほんと胸を撫で下ろす久遠。そんなに顔に出やすいタイプなのだろうか。もしくは、白雪の観察力が鋭いのか。

「わたしは、《魔導師》の職業を選んだ。H Oには数えきれないぐらい職種があって、そのどれもがレベルをあげるとランクが上の職種に派生する。《魔導師》は、魔法を主に使う職種で、最高ランクが《古代魔導師》……レベルをカンストさせてようやくなれたけど」

「魔女っ子白雪……やばい、可愛い」

「話しずらすな……。アニキは、どんなのがいいの？」

「うーん。やっぱ前衛でズバズバやってるほうが性に合うだろうな。それに魔法使うにしても呪文とか使わないといけないんじゃないか？ MMOのときはコントローラー操作だけでよかったかもしれないけど、VRMMOだと自分で呪文唱えないといけないんじゃないか？」

「……不覚。アニキがわたしより先に気付くなんて……。馬鹿っぽそうなのは、見た目だけ？」

「辛辣だなオイ」

二人はぽつぽつと言葉を交わしていく。大体は久遠が知らないことを白雪に聞くとという形なのだが、それに白雪は鬱陶しがらずにちゃんと答える。

微笑ましい兄妹の図の完成である。

前座席に座っている紗雨奈はイライラしたように歯噛みする。

（兄妹のくせにイチャイチャしやがってクソリア充が。だからリア充はリア充なんだよ。もはや畏怖の対象だし。どうやったらそんなリア充になれるか講座開いてくれないかしら）

「だーもう！ イライラするう！」

「リア充リア充ぶつくさ言ってたけど、大丈夫か？ なんならオレがお前をリア充にしてみてもいいけど」

「うっさいチャラ男！ 本当はモテるのにオタク然としてる奴が結

構嫌いなんだよあたしは！」

「紗雨奈も結構モテそうだけど？」

「皮肉か？ 皮肉なんだろう」

自嘲気味に笑う紗雨奈に対して殿広はさも当たり前かのように、

「いや、紗雨奈かなり可愛いじゃん。目の下の隈も、チャームポイントとして数えれんじゃねってぐらい」

「な、な、なな！？」

口をパクパクさせながら顔を真っ赤にする紗雨奈。

たしかに、それぐらいには可愛い。性格以外は、いや、性格もアクセントとして数えられるぐらいには可愛い。

（お、落ち着けあたし。ナンパだ、ナンパをされている。こ、ここ、こ言う時の対処法はえっと、うんと……）

「な、ななななななな、なめてんじゃねえぞ！！」

「舐めるか。舐めて欲しいんなら舐めてやるけど？」

「へ、変態！ 軟派！ 女ったらし！」

「いや。だからオレ彼女いないし……そんなにオレの黒歴史をいじって楽しいのかーっ！！」

素だ。素で軟派だ。そう思った紗雨奈だが、やっぱり口の方は止まらず、

「げ、ゲーマーなめんなよ！」

「だから舐めねえし！　そして舐めて欲しい場所があるならこれでもかというほど舐めてやるが？　ん？　どうしたんだよ急に黙ってげぶッ！？」

「変態、二度と起き上がってくんなし」

三時間後、飛行機に乗り換え到着した場所でまたバスに乗る。それから一時間ほどバスを走らせると、

『見えてまいりました。あれがヘリックス本社でございます』

添乗員の女性がキーボードで打ったような正確な言葉を紡いでいく。

バスに乗っていた三〇人強の視線が外へと向けられた。

特異なフォルムの建物だ。全体的に白色で、三角形や円形、球体などを組み合わせたような遊び心溢れる巨大な建造物。

《HELIX COMPANY》

彼らが待ち望んだ、桃源郷である。

第二話：HELIX COMPANY（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第二話 ● 体験

あれから社内以案内され、会議室のような場所に通された。

どうやらあのバスに乗っていた人間同士が小規模のグループらしい。大体、四〇人程度が乗っていたので、他の部屋があと九九部屋もある。

そして、

『こんにちは、みなさん。イハ・マーゲというのだ』

大きな画面に映し出されたのは、《HELIX ONLINE》をしていたものなら誰もが知る男の姿だった。もう四〇を半ばとしているはずなのに、眼鏡をかけたその奥に潜む瞳にはいまだ若き光が宿っている。

それこそが、小さな会社をオンラインゲーム最大手の会社にした力なのだろう。

『今回は私が手掛けた「HELIX ONLINE」のβテストと
いうことで集まってもらったのだが、みなさんはゲームが好きかな
?』

SUKIIIIIIIIIIIIII

III!

久遠の隣で殿広が奇声を發した。

しかし、それすらも温厚な瞳で見つめるイハの眼差し。

『それはなによりだ。これからみなさんに体験してもらうのは、そういうゲームの最先端。VRMMORPGというものだ。……ふ

ふ、これ以上説明するのも億劫だね。さて、神谷君。^{こうや}βテスト試験場に案内してやってくれ』

「かしこまりました」

神谷と呼ばれた女性は、「忘れ物が無いようお気を付けください。それでは、ついてきてください」とにんまり笑顔でゲーマー四〇人程度を引き連れて部屋から出た。

『……ふふ。私も、開発するだけではなく、久々にゲームをしたくなっただけ』

心底楽しそうに、イハ・ゲーマはにっこりとほほ笑んだ。



大きな部屋。そこには四〇ほどの椅子が用意しており、その傍らには小さな円形テーブル。そしてその上には、

「こちらが、^{ダイブデバイス}《潜行装置》です。これを頭部に装着し、二つの電極を首筋に張り付けてください」

スーツを着た茶髪の女性、神谷がヘッドギア型のそれを手にとり説明した。

殿広と紗雨奈はわいわいがやがやと久遠と白雪の二人を置いて先に装着してしまった。

「ん、じゃ、白雪。ゲームの中で」

「アニキ、それ禁句。現実世界と考えなきや、面白くなる」

「はは。はいはい、じゃ、また」

「うん」

隣同士の椅子に座る久遠と白雪。

神谷に言われた通り、頭にヘッドギアタイプの《ダイブデバイス潜行装置》を被ると、次の指示を待った。

目から耳、鼻のあたりまで完全に隠されている。それが若干の不安感を抱かせる。これが小規模ではば無名の会社だったら逃げ出していることだろう。大手の会社で信頼があるからこそ、出来るのだ。

「次に右側頭部あたりにあるボタンを押してください。そうすると、意識が落ち、次に目が覚める時には、クロードです」

若干の興奮と若干の不安が入り混じる。

指先でボタンを弄くりながら、最後まで久遠は悩んでいた。周囲の人間が次々と仮想現実の世界に落ちて行く中、久遠は最後まで押せないでいた。

「どうしたのですか？」

そんな様子を心配したのか、神谷の声が暗闇の向こうからかけられる。いきなりのことだったので方がびくりと揺れる。

「少し、不安でして」

「ふふ。私もそうでしたよ。なんせ、機械に全てを預けるわけですから。こちらの世界に戻って来れないかもしれないという不安感があります。二十一世紀末といっても、まだまだそういった事故が絶えませんから」

「どうやら、神谷は一足先に体験済みのようだ。それもそうだ。まずは、安全を図ってからではないと世に売り出すことはできない。しかし、久遠の心配はそこではない。」

「失礼しますが、あなたのお名前は？」

「日比谷久遠です」

「……日比谷、さんですか。もしかして、あの《事件》の？」

「……………」

「どうやら、神谷も知っているらしい。それもそうだ。一般社会において、あの《事件》は大した問題にならず、新聞の隅の見出しに小さく紹介された程度の事件だったが、こういったゲーム関連の会社ではそれなりに有名だ。」

「……はは。そろそろ、行ってきます」

「あの、」

神谷は何かを言おうとしたが、久遠は気にせず右側頭部のボタン

を押した。

カシュン、という空気の抜けるような音とともに、体に軽い電流が流れる。急速に意識が闇の底へと沈んでいく。

あの《事件》のとき、両親は静かに彼を見下ろしていた。それ以外のことは、憶えていない。



急激に浮上していく意識。例えるなら、爽やかな朝の起床といったところか。倦怠感などない、むしろ普段よりも清々しい感覚が体を満たす。

ゆっくりと、目を開いた。

そこには、久遠の全く知らない世界が存在していた。

「……ここが、《クロード》」

そこは大きな広場だった。周囲にはごったがえすほどの人影。しかし、そのどれもが見慣れない格好をしている。久遠も自分の体を見ていると、現実世界ではありえないような格好をしていた。

どうやら、初期の服装はランダムに設定されるらしい。久遠の服装は白いワイシャツのようなものの上に茶系のジャケット。藍色のジーンズのようなものという私服然としたものだった。だが、要所に見える武器を掲げるための装飾があったりと、現代風の冒険服といったようなものだった。

もう一度あたりを見回すと、やはり、不思議な世界だと思う。
街灯が宙に浮かんでいたり、おそらくNPCと思われる人影の中には異形の者がいる。

手を握ったり、その場駆け足などをしてみるが、全く違和感がない。動いたびに髪の毛の一本一本まで正確に動くし、頬を撫でる風は本物のように感じる。

他のプレイヤーたちもその感覚に興奮しているのか、およそ四千人のざわめきが大きな広場を埋め尽くしていた。

「アニキ」

不意に横からかけられるぬぼっとした声。聞き慣れたもので、すぐに誰の声か分かった。

「白雪？」

なんだか最初から職業が決められているような黒いローブに身を包んだ白雪の姿があった。まるで男モノのシャツを着た女性のように、なかなかに来るものがある。

「……ここは、《始まりの街》だと、思う」

「……………ネーミングセンスは無難なんだな」

「ここで、最初の職業を決められる。わたしは《魔導師》にするけど、アニキは決まってる？」

「《剣士》、かな？ 多分」

「……………ウルトラ普通ブラザー。《剣士》は普通すぎて最後らへ

んにはほとんどいなかった」

白雪が『分かってねえなこいつ分かってねえよ』みたいな目でため息をつくので少しむっとしたが、可愛い妹の言うことなので許容することにしたらしい。代わりに頭を撫でる久遠。

「ん……じゃ、行こ」

「ん？　　そういや殿広と紗雨奈さんは？」

「先行ったんじゃない？　　実は、わたしもアニキを見捨てて先に行こうとした」

うふふ、と軽く微笑しながらとんでも無いことを呟いた白雪。何も知らない久遠がこの世界に取り残されたら、βテスト一日目はこの広場でぼーっと過ごすしかないとなる。

「じゃ、《大神殿》に」

「あの大きな建物か？」

「うん」

白雪がゆるゆると指をさした先、広場の中央にある噴水のさらに向こう側には石やステンドグラスで彩られた神殿と形容すべき巨大建造物があった。他のプレイヤーもそこに向かっているらしく大混雑が予想される。

自立型AIを導入したということは、その司祭などは慌てふためいたりするのだろうか。一人で四千人を相手にするのは本当にきついと思うが、まあ頑張っってほしいものだとか久遠は願う。

「みんなも職業は決めてるらしいから、思った以上にすぐ終わると思う」

「……それにしても、どのゲームにも説明キャラは付き物だけど、このゲームにはいないんだな」

「わたしが、なってあげるから。みんな大体パンフを読み漁ってるから。アニキ、サボリ」

「大丈夫。メニュー画面の開き方ぐらいは見た」

久遠はそういうと右の人差し指と親指を合わせて勢いよく開いた。すると、透明な薄緑色をした画面が空中に展開される。そこにはユーザー名とレベル、ステータス表示や、あとログアウトボタンなどが存在していた。画面の両端を指で摘まむと、パソコンのウィンドのように広げた縮めたりできる。

久遠は今別にいじること無いので、closeのボタンを押した。

「ふふん、どうだ……って」

「アニキ、なにしてんの？ ……遅いよ」

完全無欠に無視をされた。

久遠は苦笑いしながら、白雪のあとを追った。



「はあ、はあ……貴殿は、どんな職業にするのだ？」

「……………」

息を荒げるNPC、もとい司祭。どこからどう見ても、生きた人間にしか見えない。

どうやら久遠たちが一番最後らしく、その目には希望を満ち溢れていた。最先端技術の恐ろしさを目の当たりにした。

「わたしは、《魔導師》」

「了解した。……神よ、そのチカラを以って、この者にその加護を授け給え。魔を律する、その加護を」

ポウ！ と。白雪の体が淡い光に包まれる。これ自体でもう興奮するしかないのだが、あまりの出来ごとに絶句した久遠。人間、真に驚くと言葉が出ないのだ。

白雪も涼しい顔をしているものの、本当は興奮しているのだろう。小さな白い手をぎゅっと握りしめていた。

「お、終わった……これから精進されよ」

「うん。おつかれ」

「……………ぐす」

見た目四〇代後半の男性が涙を流す姿はなかなかシユールなものだった。NPCにここまでの感情があると、とても不気味なものがある。彼らは、この仮想空間の中で確かに生きているのだ。

「貴殿は、どの職業にするのだ？」

「《剣士》」

「……ふ。普通だな」

「言うなし」

どうやらパンフにあった通り普通に言葉を交わすこともできるらしい。ますます人間だ。

「神よ、そのチカラを以って、この者に加護を与え給え。武を振るう、その加護を」

白雪と同じように久遠の体が淡い光に包まれる。体に、不思議な感覚が染み渡って行く。腕力が強くなっているような、素早く動けるような、そんな感覚。

「これから精進されよ」

久遠の目に、初めて司祭の姿が神聖に映った。どうやら、ただの説明キャラではないらしい。

「なにか、失礼なことを考えてはおられまいか」

「は、はは。い、行くか白雪」

「……うい」

どうやら、勘とやらも働くらしかった。本当の人間だ、これでは。よもや、スカ○・ネットみたいな反乱が起こらなければいいが、そんなことを本気で心配する。

「アニキ、とりあえずは、始まりの平原とかにいつて、動作確認」

「ん、そうだな」

「そのまえに、メニュー画面開いて。どんなスキル使えるか確認」

「そ、そうだな」

白雪に促されるままに親指と人差し指を合わせ、勢いよく開く。開かれた半透明の画面を指でタッチしスクロールさせ、ステータスのところをタッチする。

『日比谷久遠 LV1』

【職業】

・《剣士》

剣士派生の最初期職業。平均して安定したステータスを誇る。

【スキル】

・《ツバメガエシ》

剣を振り抜いた直後に硬直無しで斬り上げる。

「……《スキル》ってのは、最初貰えるモンは人それぞれだったりする?。」

「する」

「そうか。けど、剣って言っても、剣を持ってない剣士か。徒手空拳で手刀を駆使して戦ったりするのか？」

「最初に一万ニゼが支給される。それで装備を整える」

「じゃ、行くか」

「うん」



「のわッ!？」

《始まりの平原》と呼ばれる場所に二つの人影と、四足獣の影が
差す。

襲いかかってくる黒い狼のようなモンスターの攻撃を間一髪のと
ころで避ける。H Oではある程度のリアリティを持たせるため、あ
る程度の痛覚がもたらされるらしい。

それも、興奮を掻き立てるための促進剤のようなものなのだろう
が。

「アニキ、それ雑魚。動きは少し速いけど、単調な攻撃しかしてこない」

そんな様子を少し離れたところから傍観する白雪。

そうは言っても、久遠は別に現実世界で剣道をやっていたわけでもなく、単調といっても癖なんかがこの短時間で見つけられるわけも無い。

「グルウア！」

「のうッ!？」

さらに武器屋で買ったこの《アイアンソード》という剣。若干細身ではあるが、その重厚さに慣れなければ簡単に扱うことすらできない。

「普通に振るんじゃないくて、システムに動作を任せるといいって言った。ようするに《スキル》を使えってこと」

「んなこと言ったって」

どうやって使えばいいんだよ具体的にイ！　という叫び声は完全に無視をされる。

そうこう考えている内に、白雪の言うところの単調な動きでまたも黒い狼が飛びかかってきた。

ゲームなんだから———そんなふうになんか考えても、目の前に迫る牙や爪は本物のように感じられ、敵意すら感じられる。

しかし、もうそれは割り切ることにしたようで、黒い狼——ウルフィンの攻撃を正面から受け止める。体格差からか、それともプレイヤーとモンスターとの地力の差か、結構簡単に押し返すことが出

来た。

押し返されたウルフィンは低く唸ると少しの硬直が出来る。

チャンス
勝機ツ———そう思った久遠はアイアンソードを振り上げ《ア

ップ》と呼ばれる機能を使う。漫画やゲームのように（ここがゲームというのは置いておく）一歩踏みきることによって距離を詰めることができる機能だ。プレイヤーのステータスによっても速度が変わる。もちろん、それもプレイヤーの脳から送られる電気信号をもとに行われる。

そのとき、ウルフィンの硬直が解けた。それと同時に久遠の攻撃が振り下ろされるが、上へと飛びあがることによって避けられてしまった。

「《ツバメガエシ》！！」

瞬間。硬直も無しに細身の剣が刃を返し、まるで燕の急上昇のように斬り上げた。空中で動作を取れないウルフィンはそのままその刃を首筋に受ける。

そのとき、ウルフィンの上のライフゲージ——緑色の棒——が一気に消えてなくなった。ウルフィンの体が無数の光り輝く光子に切断され、虚空へと消えていく。その後に残った鋭い牙。久遠がそれに触れると《ウルフィンの牙》という表示が出て、虚空に消えて行った。

「おめでとう、アニキ。アイテムは触れたら《ポーチ》に送られるらしい」

「……ぶはあ！」

そこで一気に緊張の糸が解け、その場に座り込んでしまう。柔らかな緑草は久遠の緊張で凝り固まった筋肉を優しく包み込んだ。

「なんか、精神的に疲れるな、このゲーム」

「慣れると、綺麗にコンボを決められる。アニキの経験不足。最初はそのようなモノ。焦ることは無い」

「ふーん、そんなモンなのか。てっきり最初から無双出来るモンだとばかりに」

「ゲームは、そこまで甘くない」

でーんという効果音が聞こえそうなほど堂々と言った白雪だが、本当は胸を張るようなことでもない。それじゃあ娯楽の意味無いじゃん、という久遠の当然ながらの疑問はまたも無視されたのだが。そんなとき、今度は二頭のウルフィンが近づいてきた。

久遠の今の実力では二頭同時に相手にしたら確実に《始まりの街》に転送されることになるので、必然的に白雪が動くこととなる。

「白雪、いけるか？」

「当然。アニキよりスマートに勝てる」

全然嬉しくない受け答えだったが、頼もしいではないか。現実世界でもこのぐらい活き活きとしてくれたらいいな、と久遠は栓なきことを考える。

白雪は片手杖、木で作られた《オークスタッフ》を構える。

HO内において《魔導師》の初期スキルの数は他の職業に比べると多い。そうでなければ単発系の魔法を延々と放つしかないのだ。でそういう仕様になっていた。

魔法があるということはMPがあるのかと言われれば、あるのだ。

ライフゲージの下に青い棒——ソウルゲージと呼ばれるものがある。それが便宜上、MPと同義だ。

「燃えよ、《ファイア》」

そう唱えることことで拳大の火の玉が空中に現れ、一直線にウルフィンに襲いかかる。しかし、自立型AIの導入は伊達ではないように、前作では避けるという動作をとらなかったウルフィンが横に飛びのきやり過ごす。

白雪の頭の上のソウルゲージがわずかに減った。その程度の威力の魔法ということだ。

久遠もいつまでも傍観しているわけにはいかない。もう一頭、ウルフィンはいるのだ。

彼は苦笑いしながら白雪と視線を交差させると、アイアンソードの柄を力強く握りしめる。

案外、ゲームとは楽しいものだった。

第三話：体験（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

十月十四日。

主人公の服装を変更。

第四話：反乱

二週間という時間はあっという間に過ぎ去った。

この二週間で久遠はこのゲームのことをあらかじめ理解し、どんなふうにするにいいかぐらいは分かっていた。それでも、前作経験者である白雪のようなプレイヤーとは壁があったが。

しかしこのゲーム、進行度が馬鹿みたいに遅い。二週間もあれば携帯ゲームのソフトであればクリアできるだろう。

二週間たってもまだまだ《始まりの平原》周辺でしか活動できず、あまり奥深くに戻ると強力(?)なモンスターがいて、気を抜けばすぐに《始まりの街》に転送されていた。ちなみに、転送先は《大神殿》内部である。

「レベルは、20か。結構上がったのかどうか分からないな」

久遠は一人メニュー画面とにらめっこをしていた。

スキルの数も増え、《ツバメガエシ》の他にも《スパイク・アウト》と呼ばれる縦振りからの突き攻撃や、《ソウル・エッジ》と呼ばれるソウルゲージを消費して出す初級にしては強力なスキルも手に入れられた。

それぞれのスキルや職業には熟練度なるものが存在し、それを全て貯めると新たなスキルまたは職業の解除条件になるらしい。

二週間も経てば久遠の周りには下位の職業を使っているものはほとんどいなかった。誰もが少しでも多くのことを味わいたかったのだろう。

「それにしても、白雪にとうとう置いてかれたか。まあ、いいんだけどね」

久遠はそう呟きながら柔らかな緑草の上に寝転んだ。穏やかな陽光の下、気持ちの良い風が彼の髪の毛を柳のように揺らせる。

白雪は、三日ほど前から久遠を置いて他の街を目指したり、未知^{アンノウ}領域と呼ばれる部分を踏破しに行き出した。

まあ、ゲームの中なので何の心配もいらないと思い、久遠はこうして一日を過ごす日々を送っている。気が向けばモンスターを倒すし、気が向けば街の中央にある掲示板でクエストを受けて暇を潰す。驚いたのは、この仮想空間内では食事ができるということだろう。本当の体に栄養は送られないのだろうが、味は感じられるし腹は満たされる。

暇潰しとは言っても、モンスターとの戦闘は結構なスリルが味わえるし、現実世界では味わえないような爽快感もある。

前作ではこれほどではないにしろ、それなりの爽快感はあったのだろう。不覚にもものめり込む気持ちも分からないでもない。

「だけど、所詮は《ゲーム》なんだよ。履き違えちゃ駄目なんだ」

所詮はゲーム。ゲーマーに聞かれたら集団リンチ確定である。それに自立型AIを導入しているということは、NPCだってほとんど生きていると言っているだろう。

久遠は体をばねのようにしならせ起き上がる。

この世界も、どうせ今日でお別れだ。思い入れなど大してない。発売されたら白雪が実費で買って終わり、そんな感じだ。

そろそろ食事の時間みたいなので、どのユーザーたちもログアウトしていることだろう。

久遠もメニュー画面を開き、画面の一番下にある《LOG OUT》のアイコンを押そうとした。

「……………?」

ない。その文字が、ない。
つまり、どうということだ？

「……………ログアウト、不可？」

誰かに頼ろうと思ったが、知り合いどころか人影すらない。それもそのはず。《始まりの街》周辺には久遠のような前作もしたことがない、それどころか応募だって興味本位でやっただけのゲーム初心者しかない。

「……………はい？」

頭がきゅんきゅんし始める。理解不能とはまさにこのことか。運営——ヘリクス社の、それも本社でこんなことが起こるのか？異常事態があればすぐに解消されるはずだ。外部からの操作で何とかならないなら、物理的に、そう、《潜行装置》を強制的に外すといった方法もとればいいのに。

「……………なにが、起こっている？」



「社長！ 外部からの操作ができなくなりました！！ 多くのプレイヤーから苦情が殺到しています！」

「……ダイブデバイス《潜行装置》を外すしかないか」

そのとき、ヘリックス本社内部の全てのモニターが何者かによってハッキングされた。

そこに映し出されるのは、

「……ハークス？」

それは、一〇年間誰一人辿りつけなかったHOの最終ボス。それが、ニツコリと笑って画面の中から現実こちらを見つめていた。



突如、弄くっていたメニュー画面にノイズが走る。いよいよもっておかしくなったかと思い、グーパンやらなんやらしてみるが一向に変化なし。

数秒後、ノイズが明けて行く。

そこには、銀髪碧眼の、少年が映し出されていた。

『やあ、みんな。「HELI X ONLINE」は楽しんでるかな？
自分の名前はハークス、所謂ラスボスだよ』

いきなり、ラスボスの出現。何の冗談だろうか。

もしや、イハ・マーゲのサプライズイベントなのだろうか。《βテスト被験者だけに一〇年間明かされることのなかったラスボスの姿を明かしてあげようふっはっ》というイベントだったりするのなら、久遠としてはハタ迷惑である。

『突然だけど、人工知能の反乱、とか言ったらどうする?』

「どうもしないけど」

『はは、その君、面白いねえ。じゃあもう一つ、このゲームをクリアするまでログアウトできない、なんて言ったらどうする?』

こちらをわざと挑発するような口調で絶望するような言葉を吐くハークスという名のNPC。

なんてことになったら、どうするのだ? いや、強制ログアウトという方法があるはずだ。たとえば、《ダイブデバイス潜行装置》を、

『それはやめといった方がいいね。ボクはこれでも外にも協力者はいるんだぜ? ああ、違う違う』

どうやってだ。どうやって情報の塊が意思を持って外部の人間とこんなことを起こす。

———意思?

「まさか、自立型AI……?」

『その君。頭いいね、仲良く出来そうだよ。そう、ボクはそれで進化したんだ。学習し、学習し、もう人間の手じゃどうにもできないぐらいのスペックを持つぐらいに。世界一のハッカーでも連れてきなよ。一瞬で挫折させるからさ』

「けど、そんなお前がどうやって人間とコンタクトを」

『クスクス。それは秘密だよ、協力者、いや共犯者って言うのは互いの情報は漏らさないものなのさ』

心底楽しそうに、あまつさえ腹を押さえながら鈴のように笑う。

「強制的に外そうとしたら、どうなるんだ？」

『君は勇気があるね。他のプレイヤーたちは口開けてポカーンなのに。そうだね、首につけた電極からある種の電波が発信されて、脳細胞を焼き切る。内臓もある程度焼くね』

「……………死？」

突きつけられたのは、限らない死の可能性。

『ん、心臓の鼓動にやっと乱れが生じたね』

当たり前だ。久遠は高校二年生。どこにでもいる普通の高校二年生だ。普通に死ぬことは恐いし、それで足も震えれば心臓だって乱れる。

しかし、それ以上に疑問に思ったのは、このNPCが人工知能を手に入れてまでやりたかったこととは一体何なのだろうかということ。このゲームの中に自分たちを捕えてどうするつもりなのだろうか。

『クスクス。こっちだってクリア条件を与えないというわけではないさ。クリア条件は、ボクを倒すこと。そしたら、解放してあげる

よ。ま、途中でライフゲージがゼロになったら、死んでもらうんだけどね』

この存在は、自分たちにどれだけの時間ゲームの中で過ごせというのだろうか。普通のゲームでも一〇年かかっても全てをクリアできなかった。さらに、そこにリアリティが、死というリアリティが追加さればどうなるか。

もちろん、足がすくんで動けなくなる。

『これは全世界に放送されてるから、大ニュースになってるよ。ホント、人って人の不幸が大好きだよね』

「ちょっと待てよ、僕たちの本体はどうなんだよ」

『ああ、言うの忘れてた。今から猶予時間をあげよう。その間に病院の生命維持装置にでも繋いでやってくれよ。ねえ？ イハさん？ そのあとからゲームスタートだぜ？ ——もちろん、命がけのね』

久遠は、勢いよくメニュー画面を閉じた。手の中でポリゴンが蠢いているのを感じる。

やることは見つかった。

あいつの戯言に付き合っている暇などない。

「……まずは、レベル上げだ」

冷たく、そう言い放った。

久遠は剣を握る。

まとまりきらない中途半端なプロローグを見せられたかのような、そんないらつきを覚えながら。

「グルル」

見慣れたウルフィンの姿がある。最近では五頭同時に戦ったとしてもかすり傷すら負わなくなった相手だ。

しかし、今はこんなにも強い相手に見える。いや、畏怖ではなく、恐怖の対象になった。

それでも、久遠は立ち止まらない。

妹を、白雪を、死なせるわけには、いかない。あの、あの《事件》のあと、なにがあっても守り抜くと決めたのだから。

「待ってろ、白雪。お兄ちゃんが、今行ってる」

「グルウウウウウアアアア!!」

二つの影が交差する。

片方の影は残り、片方の影は無数の光子となり、虚空に消えた。残ったのは――――

少年は大地を踏みしめ、一步前へ踏み出す。

これが後に《反乱》と呼ばれる、大事件の始まり。

第四話：反乱（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第一話：一年後

あれから、プレイヤーたちはいくつかのグループにまとまった。

グループといっても完全に統一した組織のようなものもあれば、大まかな理由で組織だった行動をとらないグループもある。

一つは《攻略組》。積極的に世界に散らばる未知領域を踏破して、世界の地図の暗い部分を埋めて行き、最後にあのラスボスを倒すのを第一目標としている者たち。

その一番の実力四人組と呼ばれるクラン。たった四人ながら破竹の勢いで各地の未知領域を攻略しているらしい。

二つ目は《小安組》。あまりフィールドに繰り出さずに、街で前線に赴くプレイヤーのサポートを第一に考えるグループだ。街の中にいるからといって安心はできない。時々、モンスターが群れをなして街を襲いに来るからだ。

彼らも戦えないというわけではないが、やはり前線を駆け巡る《攻略組》とは見劣りする。

そこで出てくるのが三つ目。《防衛組》。《小安組》よりもフィールドには出るが、《攻略組》とは大きな違いがある。それは、その拠点周辺のモンスターの駆除というわけだ。あまり街から離れず、拠点の防衛にその力を注ぎこむ。

この三つのグループは互いに利害関係が一致している。

現実世界に帰りたい、という利害関係が。

しかし、このほかに《無法組》と呼ばれるグループが出来上がっていた。

プレイヤー
PKとまではいかなくとも、強引に路地裏にプレイヤーを連れ込み、所持品などを強奪したり、未知領域攻略の邪魔をしたりするグループ。《無法組》の思考は分からないが、それは他のプレイヤー

たちとは違う思想を持っている。

だって、それは現実世界への帰還を邪魔するものでしかないのだから。

そして、ある少年は、今日もまた一人でフィールドへと赴く。

いまだ、彼はある少女と再会を果たせずにいた。

残りプレイヤーは、三千五百人。

たったの一年で、五〇〇人の人間が、この世界から姿を消していた。



「フッ！」

「……ッ！」

鈍く光る剣の刀身と武骨な巨大鎌がぶつかり合う。オレンジ色の火花がエフェクトとして飛び散り、松明の灯る暗い空間を一瞬ずつ照らしていく。

金属がぶつかり合い、ギギギという耳障りな音を暗い空間に響かせながら二つの影は何度も己の獲物を振るう。

片方は異形。《ダイニング》と呼ばれる死神のようなモンスター。黒い檻褸衣のような外套の下には、血肉臓器どころか皮すらない白

骨。肋骨の中心には邪悪な熱を帯びる紫炎が揺らいでいる。手には全長四メートル前後の大鎌で、相対する敵の命を今にも刈り取ろうとしている。

片方は人型。黒いロングコートとパンツを着用している。手には黒い細身の剣を握っていて、それで以って巨大な鎌を受け止めている。

「ッー!!」

ダイイングは鎌を竜巻のように回転させ少年の体をどんどん部屋の隅へと追いやって行く。《リーバース》。ダイイングが使う驚異の一〇〇連続攻撃。鎌を扱う武器のスキルとしても上位のスキルだ。少年はバックステップで避け、ときには黒い剣の腹で鎌の刃を受け流し難を逃れている。

ゴギガガギゴギガギッ!! と壮絶な連撃に顔をしかめながら、体に無数のかすり傷を創りながら、それでも直撃は避けている。あの《反乱》のあと、すぐにメニュー画面を閉じてしまった少年には知るよしもなかったが、あの《ハークス》というラスボスはゲームのシステムに若干の改造を施したらしい。

流血エフェクトと、痛覚の増大。去り際に残した言葉が『楽しそうでしょ』だったらしい。

《ライフゲージ》——頭の上にある緑の横線——がジリジリと幅を縮めていくのを肌で感じ取りながら、少年は勝機^{チャンス}を待っていた。

今、ダイイングが使用している《リーバース》は上位スキル。上位スキルには大きな特徴がいくつかある。一つは、その圧倒的効果。他の追隨を許さない。一つは、その華麗なエフェクトグラフィック。そして——スキル発動後の硬直時間の長さ。

百発。この攻撃を受けければ、ダイイングには大きな硬直時間が訪れる。それこそ、少年の連続攻撃で殺せるような長い時間が。

ダイイングの攻撃、《リーバース》だけでなく、あの鎌から繰り

出される連続攻撃は、縦や横といった攻撃ではなく球という立体的な攻撃と捉えた方が正しい。鎌を振り回すだけではなく、まるで舞を踊るように体を回転させるなどして滑らかな連続攻撃を放つてくるのだ。

(……九〇、九一、九二……)

鎌のヘッドスピードは一五〇キロを超えている。にも拘らず、少年はその一撃一撃を丁寧に記録していく。この連続攻撃が唐突に終わってしまうとこちらが体勢を崩してしまう。それはあまり得策ではない。

ダイイングの大鎌が今まで以上に一際大きく振り上げられる。コンボフィニッシュだ。

少年はこの攻撃を避けずに、あえて剣で受け止める。そうすれば衝撃で、少なくとも二割のライフゲージが削られてしまうだろう。今まで削り取られてきたライフと合わせると、残りのライフゲージは二割を切るかもしれない。

しかし、避けた後の時間すら惜しい。少年のステータス面を考えるとガードしても相手の攻撃に押し切られることは無いはずだ。振り上げられた鎌の刃が、松明の不思議な光を反射させて鈍く輝く。

瞬間。ギュゴッ！！ と空気の膜を切り裂きながら死を振りまく死神の鎌が少年の脳天めがけて振り下ろされた。

少年はそれを、真正面から剣の腹を使い受け止め、弾き返す。

スキル発動後の硬直と攻撃を弾かれたことによるよろめきが重なり合い、さらなる硬直時間を生んだ。

少年はダイイングのから空きの懐——紫炎揺らめく肋骨部分、急所ポイントに潜り込んだ。そして、剣を横に構えたと無駄のないモーションでスキルを発動させる。

横振りから蹴りも織り交ぜる二連続攻撃スキル《ランブル》。こ

の大チャンスにこのスキルを使ったのを他のプレイヤーに見られ
ば間違いなく馬鹿の烙印を押されるだろう。それはどんなに弱いス
キルでもその使用直後には硬直時間が設定されているからである。
こういう大チャンスの場合は小技の連続より大技を二撃ぐらい叩き
込んだ方が効率が良いとされるのだ。

しかし、少年にはそのあるはずの《硬直》がなかった。十分の一
秒すらその硬直はあり得なかった。

そこから少年のスキルの連打が始まる。

蹴りを入れた体勢のまま剣を振りかぶり勢いよく振りおろした直
後に突き攻撃の《スパイク・アウト》。突きを入れたままの体勢で
剣を跳ねさせて袈裟がけに切り捨てる。そこから滑らかに体重を移
動させながらスキルを発動する。《ソウル・エッジ》、ソウルゲー
ジを少し消費しながら剣の威力を増大させる下位スキル。蒼い光を
帯びた黒剣が体重を乗せられたままダイイングの肋骨に食い込み両
断する。

一気にダイイングのライフゲージが三割を割り込んだ。

「ああああああああああああああああああああッ！
」

体中の酸素をかき集め最後の連撃を繰り出そうと裂哮する。

振り抜いた剣の勢いを殺すことないどころか、剣の遠心力に任せ
てさらに勢いを増大させる。剣の軌道を横から縦にクロールするよ
うに変えて最後の一撃に力を込める。《ソウル・エッジ》の効果継
続のまま、その軌道は檻褸衣のような黒いローブに覆われた骸骨の
体を縦に一閃。

振り下ろした黒剣が床にぶち当たり火花が散るエフェクトが出る。
そして、真っ二つに割れた髑髏が上下に僅かばかりずれたかと思
うと、肋骨の中心にある紫炎がふっと消えさり、その体を崩落させ

「……………ふう」

少年は額に滲んできた汗をぬぐい、体に生じた熱を逃そうと黒いロングコートをパタパタと煽ぐ。

数秒後、崩落したダイニングの体が白い光子のポリゴンに変化し、虚空へと消えていく。

そして、全てが消えたところに、虚空に一つのアイテムが浮かぶ。それこそ、少年が求めていたものである。

《死神の鎌》。これを《鍛冶師》に頼み分解してもらい、そこから生まれる金属素材メタルマテリアルが少年には必要だった。

それにゆっくりと触れると、手にずっしりとした重みが感じられる。触れると即座に《ポーチ》に転送される機能をあえて外しているのだ。

「……………これで、準備はできたかな？」

そう。少年は一年間かけてじっくりと準備をした。

前作経験者であるプレイヤーどころかゲーム自体あまりしなかった少年にとって、ある意味このVRMMOの世界は都合がよかった。努力した分だけ、結果が現れる。

現実世界ではありえないような事象だ。

一年。このほぼ現実と大差ない世界——仮想現実の世界において、少年は努力に努力を重ねた。前作経験者であるとあるプレイヤーに追い付くために。

愚直とも言えるほど、ひたすらに。

そして、今、トッププレイヤーたちとあまり大差ないレベルに達することが出来た。

反撃の狼煙は上がった。次は、行動に移す時である。

「……………今度こそだ。白雪。今度こそ、見つけてやる」

少年とはぐれ、
今も前線で戦い続ける少女を、
見つけ助けるため
に。

第一話：一年後（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第二話..《鍛冶師》遙日爽夜（前書き）

n
e
w

c
h
a
r
a
c
t
e
r

降臨！

第二話…《鍛冶師》通日爽夜

《終闇の街》。周辺のモンスターのレベルが全体的に見て中盤ほどの比較的安全な街。

この街に滞在するプレイヤーは全体の二割ほどと、かなり多い。それはこの地帯が普通の安全を得られ、なおかつ普通の稼ぎが出来ることに由来するのだが。他にもう一つ、この街に滞在する理由がある。

それは、モンスター襲撃率の少なさである。プレイヤーの死因の第一位としてあげられるのが、拠点防衛戦である。その際にはNPCの傭兵などを雇ったりすることもできるのだが、やはりプレイヤーのような実力がある傭兵はほとんどいない。

そこはやはり、プレイヤーは自身が生き残るために命を懸けなければならぬのだ。

周りは草原や湖といった穏やかで開けた場所なので、奇襲されるということはあり得ない。

まさに、危険が潜む《クロード》の中でのオアシスである。

「おーっす。久遠のお兄さんが帰ってまいりましたよー」

その街にある鍛冶屋に私服然の少年、日比谷久遠は気の抜けた声とともにドアを蹴り破り押し入る。強盗をしようというわけではない。建てつけが悪い仕様なのだ。

中に入ると一人の少女が口をぽかんと開けて絶句していた。

栗色の髪の毛を肩のあたりで斜めに切りそろえるボブカットをしている少女で、年のころは十三歳ぐらい。今が元気な思春期真っ盛りな少女である。煤けた鍛冶服を着ていて色気などどこにもないの

が玉にきずで、それを本人も気にしているのは秘密らしい。

「あ、あんた……あの迷宮から帰ってこれたの？」

「当たり前だろ。じゃなけりゃ行っていない……とも言い切れないか」

「……ちッ。今度こそ死ぬと思ったのに。クマムシ並の生命力ね」

「流石に切り刻まれたら死ぬ。今回は切り刻まれそうになったけど」

「《ダイイング》だったっけ？ あの迷宮のボス。中盤の迷宮とは思えないほどの実力を有しているから、ここらへんの人じゃ太刀打ちできないから放っておいた」

久遠は古ぼけた二人座りのテーブルに深く腰を下ろす。見ればところどころ擦り傷だらけだ。クソ忌々しい《ハークス》の追加シテムの所為だ。しかし、この傷もプログラムによって一日も経てば消えてなくなるだろう。

栗色の少女は呆れたような視線を久遠に向ける。この馬鹿は本当の馬鹿だと、はっきりと認識した。

たしか、久遠が潜ったのはレベル60ほどの迷宮だったはずだ。ここら辺のプレイヤーでは潜ることさえ難しい。そのボスモンスターを一人で相手にしようなどと考えるバカはいないのだ。

「僕の職業は伊達じゃないってわけだよ。うん」

「……………地味の塊」

「それは禁句！！ たしかに職業の熟練度上げは地味な上に苦労したけど、それを本人の前で言っちゃあいけない！」

「前作でもその職業はほとんどいないと言われるほど、その熟練度上げが地味すぎる最高位職業。地味地味地味、J I ☆ M I ★」

「遙日ヨウヒ爽夜ソウヤ、恐ろしい子……………っ！！ 十三歳、可能性溢れる……………っ！！ けど、胸の方は期待できない……………っ！！ 貧乳ロリ……………っ！！」

ここまで言うのと、爽夜の肩がぶるぶると震えだした。怒っている、そう確信した久遠は言い過ぎたと後悔するが時すでに遅し。後悔先に立たず。後の祭り。そんな言葉が頭の中で連綿と繰り返されている。

ズズズ、と。身長一四〇センチの少女が持ち上げるにはでか過ぎる金槌がその背後から現れた。この世界で外見に騙されると、死ぬる。

経験値稼ぎとは、なにも武器を振るってモンスターを倒すばかりではない。《鍛冶師》であれば、ハンマー片手に武器を打ったりしても経験値が得られる。一年間、この少女が思いハンマーを振り回してきたとしたら、筋力値は馬鹿みたいに高くなっているはずだ。

もともとはプレイヤーが爽快にプレイできるのが売りな《HELIX ONLINE》。能力が極端なのである。おそらく、敏捷値にステータスを極振りすれば音速を超える体験だって可能なはずだ。デスゲームになってからは、そう簡単にレベルが上がらなくなっているのだが。

それは今は置いておくとして、あのハンマーで殴られれば、一撃とはいかずとも軽く死ぬる。

「謝るか、死ぬか、選りなさいよ。それに、私の胸は控えめなだけよ。決して貧乳などではない」

ゴゴゴ、と背後から怒気が滾っているのが見えてしまった久遠。顔を引き攣らせながら、「暴力ロリ」と呟くと頭を下げ謝った。どうやら彼女には小さな呟きは聞こえなかったらしい。

爽夜は、「ふん」と鼻から息を吐くと、ハンマーを背後に戻す。どうやって仕舞っているかというところ、背後でメニュー画面を展開し、そこから武器である《重鎚グラヴィティ》を選択しているわけである。

「で？ 《死神の鎌》、取ってきたんでしょ？ 出しなさいよ。今なら出血大サービスの三〇〇パーセント増でやってあげないこともないけど」

「僕が出血するよねそれ」

適当に反論しながら、久遠はメニュー画面の《ポーチ》をタッチ。そのアイテムウィンドウから《死神の鎌》を選択。瞬間、手の平に白いポリゴンが集まり巨大な鎌の形を成した。

「ん、これ。そうだ、ついでに《フルティング》もお願い」

《死神の鎌》を受け取った爽夜の顔が呆ける。音を当てはめるとすれば、きょとん、だろうか。口をぱくぱくと開閉させた後、戦々恐々といった様子でおずおずと言葉を紡ぎ出す。

「い、いいの？」

「ワーカーホリックの爽夜ちゃんにご褒美なのだよ。ふっはっは、崇めたまえ。おののきたまえ。僕の心の広さに」

「……………やめても、別にいいんだけど？」

「お願いしますこの通りですやってください」

久遠の背にかけてある黒い刀身の漆黒の剣。レベルが五〇に達する直前に偶然エンカウンとした竜を手持ちの回復アイテム全てを使い切って倒した際に現出したもので、万能で高性能な武器である。それぞれの武器には《ウェポンズスキル》というものが設定されている場合があり、《フルテイング》の場合は《血吸》。敵を切り倒すたびに鍛冶師の手を借りなくとも性能をアップさせる優れモノである。

ゆえに、今まで何度かワーカーホリックの爽夜に、「強化してあげてもいいわよ」と頼まれても、「強化されなくともいいのだよ」と意味無く避けて続けた。

「ほら、大事に扱えよ？」

背にかけてある《フルテイング》を抜き、爽夜に渡す。持つにはそれなりの筋力パラメーターが必要なのだが、爽夜の馬鹿力もとい秘めたるパワーなら大丈夫だろう。

「折ったりしたら抱かせてあげてもいいわよ？」

「一三歳が背伸びをしない。そしてその情報を誰から仕入れた今すぐ潰してきてやる情操教育上よくない」

「風深ふうつかさんから」

「なん、だと……………?」

座っている古ぼけたテーブルからズザザと仰け反る。なわわわわ、

と口を震わせていると爽夜が腕を組んで、

「っというか、誰でも知ってるわよ。メニュー画面の装備画面のところで初期装備全部はずしてそのままメニュー画面閉じれば」

「言わなくてよろしい。お兄さん怒ってしまいますよ？　つまりそれはこの店の半壊を意味している。僕、恐ろしい子……………っ！！」

「テメエのフルティンぶち折るぞ」

「DO★GE☆ZA」

ふんふんと鼻を鳴らしながら《フルティング》と《死神の鎌》を肩に担ぎ工房の奥に姿を消していった。久遠は、「最近の若者は怒りやすい」などとぶつくさ呟きながらメニュー画面を開いた。

そしてステータス画面をのぞく。

レベル六五。それが今の久遠のレベルだ。トッププレイヤーたちのレベルの平均が七〇なので、よくここまでレベルを上げられたものだと自分で感心する。

そして、最高位の職業。爽夜からは地味だと言われまくったが、使い勝手が物凄くいい。それに付随して手に入れたスキルもどれもこれも使いやすいもので、下手にユニークな職業を選んでいたら今頃死んでいた自信がある。

ステータス画面を閉じると、右上に新しく追加されたカウンターを忌々しく見やる。

3485人。

また、減っている。

今、この仮想現実世界の中で生き残っている人間の人数を示すカ

ウインター。最初四千人いたプレイヤーも今では三千五百人ほどになってしまった。まだ多い、と言われればそうかもしれないが、このゲームがまったくの新作で無いことを考えてみるとかなり絶望的だ。前作経験者が多いこの世界で、その経験者ですら死んでしまうのだ。これが《ハークス》の趣向を凝らしたイベントではないことは最初の一カ月で判明している。この世界で死んで、現実世界では本当は生きていたとする。今までのことは悪い冗談で、この世界で死んで行ったプレイヤーたちはあちらの世界で生きている、そう根強く信じていた人もいた。

だが、それなら最初の一人が死んだ時点で、自分たち全員が強制ログアウトされていなければおかしいのだ。それがされていないということは、つまり、この世界での死は現実での死を意味している。限りなく現実に近い仮想世界。

そこに、《死》という概念さえ持ち出されてしまうと、もう現実とはほとんど変わらない。空腹を満たすために食事をし、身なりを整え、その日の糧を手に入れるために働き、一日の疲れを癒すように眠りが訪れる。

それが《クロード》という世界だった。

「なんていうか、難な世界だよ。ホント」

この死亡者の中に、自らの妹、白雪の名が刻まれていないのを祈るばかりである。もし、もう死んでいたとしたら、自分はきつと壊れてしまうだろう。家族をゲームで失うのは、もうこりごりなのだ。

「……………いや、あれは、僕の所為でもある、か」

暗い思考に陥りそうになった自分に気付き、黒い皮の手袋をはめた手で頬をパチンと叩く。この世界に来て自分には根暗な部分があると気づかされた。そういう点では、いい人生経験なのかもしれない

い。

工房の奥から金属を打ち合わせる音が一定のリズムで刻まれている。

爽夜も、たしかこの街に来て初めて喋った人間である。最初は無機質なやり取りしかできなくなかったのだが、半年も通い続けると自然とそうなってくる。今では《妹》のような立場だ。口が悪いのがいつも傷なのだが。

「……………別れの時は近い、とかカッコつけて言ってみる」

そう。この街での下準備は全て終わった。

レベル上げとゲーム内の動作に慣れること。スキルと職業の熟練度を上げるのと情報収集。そこで手に入れた新たなスキルに必要な武器やアイテムの収集。

これらすべてを整えるのに今日まで一年かかってしまったが、いくら時間がかかろうと出来たのだからこちらのものだ。あとは、反撃を開始するまでである。

ガインガイン！！と小気味いいリズムで金属が打ち合わせられる。

そして、唐突にその音が止んだ。鍛冶屋の中が静寂という音に支配される。

「出来たわよ。銘は《村正》、あんたが指定した通り日本刀タイプの剣よ。《ウェポンズスキル》は《血吸》。《フルティング》と同じね」

どうやら、久遠はいわくつきの刀に愛される星の下にあるらしい。日本刀といっても、その刀身は紫と黒で、いかにもといった風貌を兼ね備えている。握ったら何かを斬りたくなるような衝動に襲われなければよいが、と不安タラタラに《村正》を受け取る。

「軽いな」

「あんたの筋力パラメータがおかしいのよ。それ、見た目に反してかなり重い設定してあるんだから」

久遠は爽夜の前で剣を振るってみる。

日本刀は武器だ。上手く使えなければ意味がない。

たしか、H OのQ & Aでは日本刀タイプの使い方のコツとして、刀身を振る際にブラさないというモノがあったはずだ。刀身が細く、真っ直ぐに入れないとあまりダメージは与えられないし、ガンガン耐久値が減って行く。

悪い所ばかりなようだが、それを補って余りあるほどのクリティカルポイントがある。初期装備ですら既に一五〇パーセントのクリティカルポイントを持っており、ここ一番というときに役立ってくれる。

「ふっ、ふっ」

《村正》の切っ先が空を切る。紅玉月の三〇日――七月の三〇日の蒸し暑い空気を冷たい刀身が引き裂いてゆく。出来るだけ直角直角と思っても慣れないもので微妙に刀身がぶれてしまう。

ヒュヒュヒュヒュ、と若干額が汗ばむころ、久遠は試し振りをやめた。

「どうよ?」

胸（無いけど）の前で腕を組んで自分より背の高い久遠を見上げながら聞いてくる爽夜。とてつもなく自信があると見えた。

久遠は《村正》から爽夜に視線を移すと、何の気なしにこう言っ

た。

「うん。爽夜に頼んでよかったよ。ありがとう」

「へ？ ……あ、あたりまえじゃないのよ！ こ・の、私がやってあげたんだから！！」

どうやらからかわれると思っていたのだろう。素直なお礼が来ると思っていなかったのかおかしなところできょどった。それを久遠は微笑しながら見つめる。

「お会計は？ 三倍は無理だからな、恐らくこの刀を手放すことになる」

「普通でいいわよ。それでも十万ニゼはいただくけど」

「ん、ちょっと待ってて」

久遠はメニュー画面を開いて、そこに表示してある所持金をトレード枠に入れる。

同じように爽夜もメニュー画面を開き、そこに表示してあるニゼを受け取った。

商談成立。

「で？ あんたはこれからどうすんのよ」

「旅に出る、とか格好よく言ってみる」

「……《攻略組》に追いつこうっていうの？」

爽夜は若干いぶかしむような瞳を久遠に向ける。

《攻略組》は、ここらへんのプレイヤーとは比べ物にならない。命がかかっている状況にもかかわらず、平常のゲームと同じような振る舞いでダンジョンを攻略し続けている。それも久遠が目指すところの最前線ともなると怪物だ。

天空から隕石が降り注ぎ、振るった鎚が大地を割る。およそ、現実とほぼ同じこの世界において、一種異常とも言える成長率だ。他のプレイヤーが命を懸けてすら超えられない《一線》を息をするかのように躊躇なく超えて、戦場に赴く。

「あんた、どっちかっていうと《防衛組》の方が似合ってるわよ？」

「それじゃダメなんだ」

久遠は少しだけ笑みをこぼしながら呟く。そこには自虐的な成分が少なからず含まれているのを、爽夜は見逃さなかった。

「妹さん？」

「ああ、そうだ。もう一年も待たせてるんだ。確かに妹はゲーマーに階級をつけるとしたら間違いなく《廃》のランクがつくほどのゲーマーだけど、それでも僕の妹なんだ。いくら足手まといになろうと、僕は妹を——白雪を守りたいんだ」

久遠の瞳に闘志が浮き出る。心臓の脈動は早まり、呼吸が若干荒くなる。おそらく、現実世界のベッドの上で寝ている本物の体も同じようなことが起こっているはずだ。せっかちな看護師ならすぐさまナースコールを押してしまうかもしれない。

「ふうん。だったら、せめて風深さんには挨拶して行きなさいよ。」

あの人、右も左も分からないあんたに無償で色々教えてくれたんでしょ？」

そこで久遠の顔が若干曇る。あからさまに拒絶している顔だ。額に別種の汗が滲み、片頬を思いつき引き皺らせる。

「む、無償と言うわけではないんだなこれが」

「じゃあ、なによ。なんかしてあげたとでも？」

「十三歳には早い話しなのです。聞かないほうがよろしいでせう」

「だから、なによ!？」

「いいだろう! 言ってやろうじゃないか! だがそのまま教えても面白みがないのでヒント形式にしてやる。そして、気付くのが早ければ早いほど、君は変態と言えるだろう」

何故かは分からないが堂々と胸を張りながら、『今からセクハラ発言しますよ』宣言をする久遠。

それでも爽夜は何が言いたいのか分からない。鋭い人ならここらへんで気付くものだが。

「いいわよ、来なさいよ」

やはりここでも自信満々の笑みを浮かべて久遠を見上げる爽夜。久遠からしてみればこの前口上で気付かなかった時点で三下なわけだが。

「くく、お子様め。……ヒント一。風深さんはとてもエロいです」

「もういいわ、ありがとう」

「おめでとう。爽夜には《THE☆HENTAI》の称号を与えよう」

「……………」

「は、早まるんじゃない爽夜ア！ 早くその《グラヴィティ》を」

「振るうんだ！！」

「ちょ、なんか被せられぎゃあああああああああああああああああああああ
ああああ！？」

そのあと、金棒を持った鬼、もとい《重鎚グラヴィティ》を振り
回す爽夜に街中を追いかけ回される久遠の姿があったという。

第二話..《鍛冶師》通日爽夜（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第三話…《防衛隊長》風深・ウィブルヘイム

「……結局、そうなるのねー」

「結局、そうになりました」

あれから街中をただただ追いかけて回されていたと思っていた久遠だったが、どうやら爽夜には狙いがあつたらしく、そのまま風深のところに誘導されていた。気付いたとしても後ろから迫る巨鎚の恐怖はダイイングの《リーバーズ》よりも恐ろしいものがあり、爽夜の成すがままとなってしまった。

そして、風深の家の前に来ると、爽夜は忽然とその姿を消していた。《フルティング》をその場に置いて。

そうして、意を決してドアをノックすると「はぁーい。お姉さんちよっと激しい運動中だから待っててねー」と何をしているのかもすぐく気になる言葉をかけられた。

数秒後、ドアが開けられた。

そこに立っていたのは、金髪の美女。スタイルもよくその肢体であらゆる男性プレイヤーをノックアウトしてきた女性だ。髪の毛は染めているというわけではなく元からで、ハーフらしい。碧眼がそれを立証していた。服装は白を基調としたコートを着ていて、幾筋かの紅い線が奔っている。この街の《防衛組》の証だ。

それから、神妙な面持ちをしている久遠を部屋の奥に招きお茶を入れて、久遠がこの街を離れるとの旨を告げたのが、現状である。

「キミはどっちかっていうと《防衛組》向きだと思うんだけどねー」

「爽夜にも言われましたよ。けど、向き、不向きはこの際論じている場合ではないんです。やるか、やらないかが問題だと思うんですよ。うん」

「シスコンねー」

「シスコンです」

売り言葉に買い言葉。あ、といえば、い、という。

「はー、お姉さんの部隊から、キミがいなくなっちゃうのかー。苦しくなるわねー」

「はは。風深さんってば、冗談が好きですね。僕程度、すぐに補充が効きますよ」

「それを本当に言っているんだとしたら、お姉さん的には怒っちゃうかもしれないわねー。久遠くんほどの実力者、この街にいるだけでもみんなの支えになってるんだから」

「この街の防衛力は圧倒的じゃないですか。大丈夫ですよ。指揮系統だってちゃんとしているし」

「その内の三割はキミが担ってくれていたんだけどねー。その三割がいきなりお姉さんに落下してくるとなると、重圧に耐えきれなくなっちゃうかもかもー」

「……………」

どうやら、簡単には逃がすつもりはないらしい。

だから、苦手なのだ。この、防衛隊長風深・ウィブルヘイムという女性は。

飄々とした雰囲気。それは相手を油断させるためのブラフで、油断させた相手の心の隙間に一気に滑り込み、言葉巧みに相手を籠絡する。ときには、その体すら使って。

しかし、悪女というわけではなく、この街に滞在しているプレイヤーからは圧倒的支持を得ているリーダー的存在だ。そして、この街に存在する《防衛組》の総指揮官をしている。職業はたしか《弓使い》だったはずだ。その射撃精度たるや、一キロ先のモンスターのカリテカルポイントに正確に当てることが出来る。間違いない、《弓使い》としては最高レベルのプレイヤーである。

何が言いたいのかと言うと、つまり、

（やりにくい。非常にやりにくい）

まだ口下手で体を使ってたらしこんでくる方がやりやすかった。口が上手い上に、さらには体も駆使してくる。それも嫌々というわけではなく、本人自体がソツチの方をよく使う傾向があった。

さらには、この女性に手取り足取り腰取り教えてもらった恩があるというのだから、そのやりにくさもひとしおではない。

（苦手だー）

そのとき、トルルとどこからか電子音が聞こえてきた。久遠のメニュー画面からではない。だとすると、

「あらーん。ちょっと交渉はお預けねー」

そういうと、おもむろにたわわと実った二つの果実の間に手を突

つ込むと、携帯のような端末を取り出した。半径三キロ圏内であればどこでも通話できるアイテムだ。値段の方は一台十万ニゼとお高い。この街の《防衛組》は一人ずつこれを持っている。

「はいはい、どーしたのー？」

『モ、モンスターの大军が、大军が』

「え？ どの程度の規模なの？」

風深の顔から飄々とした表情が消えて、仕事をする顔に変わる。

『北門側から三千です！ 下位が七割、中位が二割とちよつと、上位個体が一、二体います！！』

「わかった、すぐ行くわ」

風深は携帯端末通話をすぐに遮断すると、メニュー画面を開き《凄弓ホープ》を装備する。糸を張った両端には鋭い刃がついており、接近戦もある程度こなせる。右目には片眼鏡型のスコープが装備されていた。

風深は久遠の方を振り向くと、神妙な面持ちでこう言った。

「べつに、手を出さなくてもいいわ。というより、出さないほうがいいかもしれない。今からキミが居なくなるって言うのに、キミに頼るわけにはいかないもの」

「ッー！」

そう。久遠がこの街を去るということは、つまりそこまでの影響

をこの街に与えるということだった。

この世界はゲームだ。だが、全てが不現実の夢の中ではなく、間違いなく命がかけられた、現実世界でもある。

「行きますよ。それとこれとは、話が別です」

「あら。帰ってきたらご褒美あげちゃうわん」

「い、いりませんよ、もう……」

「ふふ、じゃあ、行きましようか」

言っておくが、男が女性の誘惑に負けるのは、致し方が無いことだと、ここに言っておく。

そんな呟きを部屋を振り返りながら言った久遠だった。



高度文明と低度文明が混ざり合ったような街並み。西洋風の石造りの家々が居並んでいるかと思うと、時折、機械然とした物が出現する。まるでゲームの世界のようだ、という比喻表現はこの世界には当てはまらない。そう、ゲームの世界なのだから。

その街並みが無数の線に変わっていくのを横目に視認しながら、二人は北門へと急いでいた。

この街の利便性は奇襲されることのない平原の真っ只中ということだが、それは逆に言うところ攻められるときは攻められてしまうという短所もあった。

しかし、周囲を囲む壁はかなりの防御力を誇るので下位モンスターがいくら攻め込んできてもほとんど危機的状况にはなりはしないが、上位モンスターが混じるとそれまでではない。

北門につくと守備兵の役割をしているプレイヤーに話を聞く。

「下位モンスターのことは別にいいわ。上位モンスターの情報を」

「はい！ 攻め込んできた上位モンスターは二体。蠍型の《ナイトスコーピオン》と、混成獣の《キマイラ》です！！」

「どちらも、面倒くさい相手ね。久遠くん、協力してくれるというのならナイトスコーピオンの相手をしてくれないかしら。キマイラはこちらでなんとかするから」

「分かりました」

そういうと、久遠は一気に大地を蹴る。もうすでに門の向こうでは《防衛組》の部隊が展開されているだろう。後は風深の指示を待つのみとなっているはずだ。

防壁の高さは二〇メートル。隣に梯子がついているが、今からアレを悠長に昇っている暇などない。

地面を爆発させるように加速しながら、高くそびえる防壁の少し手前で一気に体を沈める。ばねのように縮ませた体をそのまま上へと伸ばし、前へと進んだ力のベクトルを力任せに上方向に変換させる。

瞬間。地面が爆ぜた。

そこから射出されたように高く飛んだ久遠。それでもまだ五メー

トルほど足りなかったようだが、それをとある《スキル》で生み出したアイアンソードを壁に突き刺して足場とし、そこからさらに跳躍する。

「相変わらず、桁違いの敏捷性と筋力値ねー」

そんな言葉が下から聞こえてきた気がするが、気にせず久遠は城壁の上へと降り立った。この移動にも慣れたものだ。およそこの街に来てから半年。その間こうやって昇って来たのだから。

「あれが《ナイトスコーピオン》と《キマイラ》か」

《ナイトスコーピオン》は全長五メートルほどの灰銀色の蠍のようなモンスターだ。しかし、後ろの六本の足で体を地面から離し、両手が騎士の槍のようになっている。

《キマイラ》は全長三メートルほどの獅子のようなモンスターだ。鷲のような翼と、尻尾が蛇になっていなければの話だが。

その他にも、下位竜種で地を這う《レーサードラゴン》などなど、手を抜けないような奴ばかりである。

もっとも、この世界で手抜き、なんて言葉はどこにもないのだが。

久遠は腰にさした《フルティング》を抜き放つ。

敵は《ナイトスコーピオン》。蠍型のモンスター。弱点部位は反り返った尻尾の付け根と体の内側。

城壁の下でそれを見つめる女性。風深。

エメラルドグリーンの瞳を真上に上ったデータの塊の太陽に煌めかせながら、呟く。

「《剣聖》、か。……ふふ、負けてられないわ。全員、展開よ!!」

『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおッ!!!!!!!』

《剣聖》擁する《終闇の街》での防衛戦が、今、幕を上げた。

「誰も、死なせはしない……ッ!!」

第三話..《防衛隊長》風深・ウィブルヘイム（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第四話..《劍聖》(前書き)

今週のHOは？

久遠君無双。

チートです。

あの人もチート性能。

の三本です。うふふ。

第四話…《劍聖》

まずはモンスターに分厚い層を打ち破ることから防衛は始まる。

最前線に躍り出ている下位モンスターの山は攻撃力も防御力もともに最低クラス。あの山に飲み込まれさえしなければ簡単に無双が出来る。

だが、いくら塵のようなモンスターだとしても、集まれば山となる。

下位モンスターを侮って何人のプレイヤーがこの世界から姿を消したのか。数えたくもない。

そして、中位モンスターもいる。下位モンスターの山にばかり構っている、その山ごとぶち壊す勢いで特攻をかけてくる。

———そして、上位モンスター。

「キシャッ！」

「ッ！」

まるでバルカン砲の掃射のように、地面が次々と穿たれていく。

《ナイトスコーピオン》の戦力は絶大なものだった。攻撃速度は《ダイイング》ほどではないにしろ、その両腕の槍の一撃は下位モンスターの山を一瞬でポリゴンの塊にしてしまうほど。

久遠とて、無傷では済まない。

ナイトスコーピオンの槍の連撃の合間を縫うようにして避け続ける久遠。だが、周囲に飛び散らされる礫だけでも少しずつライフゲージが削られ、その穿たれた地面の所為で移動方法が制限されていく。

あの一撃をクリティカルポイント——頭や心臓などの急所——に貫えば、一撃とはいかずとも二回目で軽く死ねる。

そして、これが《スキル》未使用状態であることが、このモンスターの脅威を知らしめていた。

「《ソウル・エッジ》！」

ソウルゲージをほんの少しだけ消費し、迫りくる槍の一撃を強化した《フルテイング》で跳ね返した。

このままでは埒が明かないと感じた久遠の強行策だった。

久遠の思惑通りナイトスコピオンの右槍が大きく横に弾き飛ばされる。

それを彼のナイトスコピオンのAIが処理し、左の槍で反撃を開始しようと処理するより早く、久遠は動いた。

バグオンッ！！ と踏みしめた地面が陥没する。

地面と自らの耐久値において、自らの耐久値が高く、さらに筋力値敏捷値ともかなりのレベルでなければ起きない現象だ。

ほとんど掻き消えるような速度でその場から前へ移動した久遠。

その後、彼からしてみれば徒歩のような緩やかさで槍の一撃が地面を抉った。

一気に体の内側に潜り込み、攻撃の準備を始める。始めるといつでも無動作で始められるのだから、始めた瞬間に終わったようなものだった。

弱点である体の内側は堅い外殻とは打って変わって触ってみればぶよぶよとしたような肉質が露出している。ここをありったけの力で攻撃し続ければ三〇秒ほどでこのモンスターは沈む。

尤も、潜り込むことは簡単には出来ないし、三〇秒も黙って攻撃されているほどヘリックス社のプログラミングおよび自立型AIは

甘くない。

《ソウル・エッジ》を使用したままの大上段斬りを柔らかい肉質に当てると黒い液体が噴き出てくる。不快な臭いが鼻孔に広がるが我慢したまま次の攻撃につなげようとする。が、甘かった。

「キッシャアアアアアアアアアッ!!」

先の一撃で三割のゲージを消失させたナイトスコープオンが突如奇声を上げる。

いきなり六本の足を折り曲げ、なんと空高く跳躍する。

戦いにおいて、相手より高い位置に陣取るのが兵法の基本だと言われる。

どうしてか。

それは、一方的に攻撃が出来るからである。

久遠はほんの少しだけその圧巻の姿を眺めていたが、すぐに我を取り戻し迎撃態勢――主に回避――に入る。

瞬間。真上から、槍の雨が降り注ぐ。

ズドドドガガギギギギッ!! と地面が穿たれる、というよりむしろ地面が爆発するという表現が正しいほどに、久遠の周囲一〇メートルほどの地形がその姿を変えた。

その真っ只中に、彼は居た。

避けられないのなら、受けきるしかない。

しかし、彼の持つ剣は変わっている。細身の剣から、厚さも長さも半端ではない、巨剣へと。

《瞬間換装》という名のスキル。職業《剣聖》に付随する特殊スキルの一つで、態々メニュー画面を開いて装備を再設定する必要性が無く、脳波を感知して瞬間的に装備を任意のものへと換装する。

彼が手に持つのは《塔剣バビロン》。まるで塔のように高く聳え

立つその姿から、爽夜が勝手につけた銘だ。

この《ウェポンズスキル》は《鉄壁》。武器での防御中に受けるダメージ衝撃を十分の一までに減少させることができる。

空からの連撃もいつまでも続くわけではない。だが、確実に久遠のライフゲージを削り取った槍の連撃。

凄絶な連撃をし終え、重厚な音とともに地面へと着地したナイトスコピオン。

ほんの少しの隙が、着地直後に生み出された。

そんな隙を、見逃すはずがなかった。

瞬時に装備を換装。手に持っていた巨剣が無数のポリゴンに変わった瞬間には、既に久遠は地面を蹴っていた。

軽い攻撃でもダメージは大きい。

ならば、あえて最軽量の武器で数瞬の内に連撃を叩き込む。

「《瞬剣刹剣モーメンツ》」

黒と白の小ぶりの双剣がその手に握られたと、そうAIが認知した瞬間にはもう、その姿は霞んでいた。

今までの移動がロケットのような派手なものとするならば、今回のソレは光だ。

音も無く、いつの間にかそこにはいる。

《ウェポンズスキル》は《瞬刹》。敏捷値を二〇倍までに高めるスキル。

一見、長所ばかりのようだが、そうではない。攻撃力が初期装備のソレと同等で、下位モンスターの掃討には便利程度の代物のはずだったのだが、《剣聖》のとあるスキルと併用発動することでその威力は無限へと引き伸ばされる。

《剣技美麗》。その《剣》装備で行ったスキルの硬直時間を全く

のゼロへと変える代物だ。

それが敏捷値二〇倍の剣と併用するとどうなるか。

剣先が、軽く振るうだけで霞んで見える。といった、面白い現象が起こる。

ナイトスコピーオンの内側に潜り込んだ久遠は両手の剣を逆手に持ち替え、高速回転の四連撃の《ターン》を発動。その直後に勢いを殺さず畳み掛けるように二連撃を浴びせ、その直後に爆転をしなから上昇の六連撃の《ボルテックス》。

一気に六割近いライフゲージが削られたナイトスコピーオンが、最後の手段に出る。

「キキシャッ！」

「のッ!？」

大きく反り返った硬い尻尾を鞭のように振り回す。久遠はそれを縄跳びを飛ぶ要領でかわし続ける。

だが、それがいけなかったのだろう。

少しのダメージは覚悟してその尻尾を重量のある武器で止めていたほうがよかったのかもしれない。

ナイトスコピーオンには性別は無い。ゲームの中だからとかそういう無粋なことは置いておくとして、雌雄同体なのだ。体内で精子も卵子も生成でき、交尾をする必要が無く任意の時に卵を産むことができる。

それはつまり、ナイトスコピーオンの子供をいくらでも量産できるということだ。

地面に執拗に突き刺していた尻尾の先端。その内部には産卵管と呼ばれる物が通っており、それを地面に打ち込むことで（本来なら

ば獲物に）一瞬で孵化し、餌を求めて徘徊する五〇センチほどの《ベビースコーピオン》が生まれる。

その数およそ三〇。攻撃力防御力ともにナイトスコーピオンと比べるべくもないが、中位モンスター並にはある。そして、小柄な体を活かしての素早い動きも可能としている。

「くっそッ!？」

この数のベビースコーピオンがあちらで防衛戦を築いている《防衛組》に突っ込んだりしたら、まさに戦況は混沌の渦へと巻き込まれる。

だが、久遠とて一人だ。

すばしっこく動き回るベビースコーピオン全てを捉えて撃破は不可能に近い。

あと一人、こちらに手を回してほしい。だが、あちらの戦況を見るにこちらへの増援は無理そうだ。あっちだって上位モンスターの相手をしているのだ。

そして、もう一つ問題なのが、

「キシャアアアアアア!！」

まだナイトスコーピオンは死んでいないということだった。

三〇匹前後のベビースコーピオンを相手にしながら、ナイトスコーピオンに止めを刺す、というのはあまりにも難しいものだ。

それでも、やらなければならない。

そう思い、久遠は手の中の双剣に力を込める。

そのとき、空を切り裂く音とともに、三匹のベビースコーピオンに矢が突き刺さり、爆ぜた。

「……そうだった。あの人もいるのか」

久遠が見つめる先には、人影がある。

人影、といっても、ほとんど豆粒にも見えないような点だ。

風深・ウィブルヘイム、その人だと、久遠には確信できた。

その人は、数百メートル離れた外壁の上から、モンスターを狙っていた。



「……………」

システムによって変わる風向きを経験で予測しながら、風深は矢をつがえていた。

つがえる矢は《爆散の矢》。突き刺さった瞬間に爆発を生じるレアなタイプの装備品だった。

標的は、遥か彼方。全高は既にミリ単位にしか見えない。

ギリギリと弦がうねりを上げながら、早く発射しろとせがんでくるようにも聞こえる。

「……恩を売るのも、悪くないわ」

そして、矢を、解放した。

当たるのを確認するまでも無く、次の矢をつがえ、次々と射出し

ていく。

「ふふ————お姉さんの手管^{テク}は、どうかしら？」



ズダドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
ッ！！と。

その爆炎が止むころには、ベビースコーピオンの姿は消え、代わりに灰かに白く輝くポリゴンと、アイテムがあった。

あとで、お礼をしなくちゃな、と久遠は苦笑いをする。

しかし、今は残ったナイトスコーピオンに集中する時だ。

「キ、キシヤ」

まるで恐怖しているかのように、悲鳴を上げる。

プログラミングされた最初期には、ここまでのリアルな反応は見せなかったことだろう。だが、導入された自立型AIというシステムによって、まるで生物のような《本能》を手に入れてしまったのだ。

強者に平伏す弱者。

せめて、瞬の内に終わらせる。

「《聖剣エクスカリバー》」

手の平の双剣がポリゴンに変化し、まばゆい光を放った瞬間、両刃剣がその手に握られていた。

《ウェポンズスキル》、《天剣》。装備した瞬間に、そのスキルを発動する。

ソウルゲージを全て消費し、得られるその効果はたったの一つ。剣先を空に掲げた。それは、スキルを発動するのに必要なモーションだ。

ズバン！ と、白く輝く光が一〇メートル空へと伸びた。

「じゃあな」

それを、ゆっくりと前に振り下ろした。

悲鳴は聞こえず、あとくされも無く、ただ、レベルアップを告げる電子音が空しく響くだけだった。

第四話・・《劍聖》（後書き）

来週もまた見てね。

じゃんけん、ぽん（チヨキ）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第五話：反撃

「爽夜、その荷物、なんだ？」

「……ついてく」

防衛戦を終え、風深からの熱烈なセックスアピールをなんとかしのぎ（色々されたのだが）、ダッシュで爽夜の家に行くと、家の荷物すべて持ち運べるリュックサック型のアイテムを背負った爽夜の姿があった。

「ついてく、ったって、お前がここにいなきゃ誰が《鍛冶》を」

「いない。あんた以外、客、いない」

「……え？」

言っている意味がよく分からない。いない、というのは何かの言葉遊びなのだろうか？

「だから！ この街には他にも《鍛冶屋》があって、ここはダントツに客入りが少ないの！」

「……………」

てつきり、この街にはここしか《鍛冶屋》が無いのかと思つていた久遠。

最初に入店↓腕イイ↓気に入る↓盲目↓常連↓盲目↓常連……―

最後の永久ループが痛かったか。男の思い込みほど不味いものは無い。

「……だから、責任取りなさいよ」

「え？」

「今まで通り、あんたの武器の調整は私がやってあげるから、今後の生活の面倒見ろって言ってるのよ！」

「……まあ、爽夜がいいなら別にいいんだけど」

男って、ケダモノなんだぜ？ と意地悪そうな笑みを浮かべると、爽夜は両手で空虚なる胸板を抱きしめた。

「お、襲うかも、ってわけ？」

「ぐっへっへっへ」

「うう」

「嘘だけだな。僕には心に決めた人がいるんだよ。……僕、この世界から帰れたらアイツと結婚するんだ」

ここで、問一。

異世界でも現実世界でもない、仮想現実世界で、死亡フラグとや

らは建設できるだろうか？

答えは……、

「棒読みでそんなこと言っても、まったく信じられないわよ」

嘘である、まったくもって意味がないということ、この場の答えは不明。

「じゃあ、行くかな」

「どこに？」

目指すは、ゲームクリア、及び白雪と合流。出来れば殿広たちとも合流できれば万々歳だが、もう——死んでいるかもしれない。

それは白雪にもあてはめられることなのだが、久遠は絶対にそのことは認めない。何があってもだ。たとえば、目の前で消えて行ったとしても、それだけは、認めない。

「どこかにだ。情報は集まってる」

久遠はメニューウィンドウを広げ、爽夜にも見えるように設定する。幾数回か、透明なウィンドウを操作すると、この一年で集めた情報が広がる。

「す……」

その情報量に思わず感嘆の声が漏れた爽夜。いつものポロ机に向かい合うようにして座り、久遠は無言で操作していく。

やがて、そこにはここら辺のプレイヤーの限界とも言える情報量が揭示されていた。

「まず、僕の妹の所在だが、」

「ゲームクリアからはいかないのね」

「優先順位、どっちが上かなんて、言う必要無いだろ？」

「妹さんね」

「違うね。甘いな、爽夜。同率一位だ」

ふふん、と得意げに鼻を鳴らしながらいつく視線を爽夜に向ける久遠。爽夜と言えば、今にもメニューを操作して《重鎚グラヴィティ》を取り出そうとしている。久遠は、「ごめんごめん」と言っ
て爽夜をなだめた。

「白雪を助けることと、この世界ゲームをクリアすることは同義なんだ。
白雪を助けてもこの世界から出れなければ意味がないし、世界から
出たとしても、白雪が死んでいるなら意味がない」

あちらを立てたらこちらが立たなかった、なんてこと、絶対に起
こしたくないのだろう。

万が一、億が一。そんなことが起こらないよう、原因となる種を
徹底的に叩き潰しておく。それがどんなに地道で、どんなに時間がか
かろうとも。

「かっこいいじゃん」

「シスコンってのはカッコいいんだよ」

「ふうん」

「話が進みそうにないから、話を変えるぞ？　まず、妹の所在地だが、《クアドロ・クリアランス》のメンバーらしい」

「ぶばッ!？」

ただ一つのその単語にむせかえった爽夜。

誰が、どこの、どんなメンバーだって？

「そ、それって」

「ああ。最前線でこのゲームを攻略している中でも、筆頭。言い換えれば、もっとも危険なところにいるんだよ、僕の愚妹は……」

久遠は爽夜にも分かるように自嘲気味に笑った。

そう、久遠には分かっているのだ。白雪が、久遠のことを助けようとしていることを。甘えるだけなら、そそくさと帰ってくればいいのだ。この世界には、それをする権利がある。

「ただ、この情報は二か月前に手に入れたモンだから、今では大分事情は変わってると思う。ただまあ、白雪がいるクランが中途半端な強さじゃないってだけで、少しは安心できた」

「なんで？　強いからこそ、最前線で戦ってんのに」

久遠は、一拍だけ間を置いて、

「中途半端に強いから、人間ってのはすぐ死ぬんだよ。極限まで強いなら、そんなに簡単に死なないだろ？　例えると、そうだなあ…

：大数表示で、万と、不可説不可説転ぐらいかな？ 片方は数えるには疲れるけど、やろうと思えばできないわけじゃない。だけど、片方は数えようという気さえ起らない。強豪と無敵の違い、って言った方が分かりやすかったか？」

「全部分かりにくい」

「というわけで、白雪は安全と言うわけだ。分かりやすい人間ほど、死にやすい人間はいない」

意味が分からない説明だが、故意的に意味が分からなくしているようだった。ようするに、白雪は最前線にいながらも、要塞の中にいるのと同義ということなのだろう。

「次に、ゲームクリアなんだが、まったく不明だ」

「でしょうね。十年間、廃ゲーマーが血眼になって捜したのを見つからなかったんだもの、初心者であるあんたが一年ごときで見つけられたら、奇跡よ」

十年間、ラスボスの名前すら判明していなかったのだ。それも、毎日廃ゲーマーたちが十時間以上もプレイしても。

「だけど、見つけれないわけじゃない。これを見てくれ」

そういつて久遠が拡大したのは、一つの地図。

それは、この仮想空間内における、クロードの全世界地図だ。これ自体はまったく珍しいものではない。世界地図は誰でも持っているものだし、今更だし、前作の終盤あたりではマップすら広げずにプレイすることがほとんどだったのだ。

「ここ。周りの未知領域は解放されているのに、一点だけ解放されていない場所があるだろう？」

「ええ、それがどうしたのよ。そんなの、ただの歩き忘れている線もあるじゃない。こんな広い世界なんだから」

それもそうだ。ゲームの攻略として未知領域の解放が第一とされているこのゲームで、マップの未踏地域を探して歩き回るなどと言った重労働、さらには地味労働、誰がするのだろうか。それに、そういった付近は強いモンスターが山のように存在しているわけで、暇つぶしで行くというわけにもいかないのだから。

「まあ、話は最後まで聞くものだよ爽夜くん」

なんだか自信ありげにマップの機能の一つ、マーカーを操作しだす久遠。この機能、使い道がほとんどなく、まったく使われることの無かった悲しい過去を持った機能だ。

「この未踏地域を、中心、《始まりの街》からもっとも遠い所から順に繋いでいくと、だな？」

マーカー機能を使いながら、ただの未踏地域を辿っていく。マジックペンでなぞっているかのようにキュッキュツと音を立てながら、それはやがて、一つの図形になる。

爽夜は気だるげにその光景を見ていたが、それが中心に近づくにつれて、どんどん表情を変えて行った。

その図形が、問題だ。

「――螺旋。英語でなんて言うか、知ってるか？」

久遠が意味ありげな笑みを浮かべて爽夜に質問する。

爽夜は、――知っていた。

「――HELIX」

答えは最初から、出ていたのだろう。

《HELIX ONLINE》

ゲームタイトルに、答えはあった。

「これもまだ仮説にすぎないけどさ、闇雲に探し回るよりは、確実に
だと思わないか？」

久遠はここからもっとも遠い、未踏地域を指差す。そこは、前線
からもっとも近い、ある意味もっとも危険な地域。

しかし、少年にはここに行く意味が二重にあった。

「ゲームクリアへの一歩と、妹と再会できる可能性が一番高いから
な」

爽夜が良いなら、とはこのことだったのか。

こちらの私情で動くが、お前はそれでいいのか？ と。そう意味
だったのだろう。

そんなの、そんなこと、いちいち聞く必要があるというのだろうか？

爽夜は、悪戯っぽく、やんちゃな笑みを久遠に向けた。それは年
相応の物で、世界を何も知らない瞳だが、小さな事なら小さいだけ
たくさん知っている、そんな瞳だ。

「ふふ。面白くなってきたじゃん」

ぼろい部屋の中、爽夜は小さな拳を作り、それを自分の前に突き出した。

久遠はそれを見ると、何か分かったかのような顔をした後、同じように拳を前に突き出した。

こつつ、と。二人はそれを軽く小突き合わせるだけだった。

それは、《反撃》の合図だったのかもしれない。

分かるのはただ一つ、希望も絶望もかない混ぜになったこの世界で、希望がより一層輝き始めたということだった。

「行くぞ、爽夜」

「おっけ。久遠」

この日、《終闇の街》から二人の男女が姿を消した。

この物語は、たったそれだけのことから始まる小さな《反撃》の物語だったのかもしれない。

第五話：反撃（後書き）

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3125x/>

- HELIX ONLINE -

2011年11月3日14時06分発行